LUZ の熊野古道案内

2006 年　9 月　上

9 月 1 日　～　9 日

je2luz.exblog.jp

目次

２００６年　**12** 月

9 月　１日　戦争の爪あと　**Little**　Britain
9 月　２日　紀和町入鹿鉱山　石原産業
9 月　３日　紀和町　入鹿温泉ホテル　瀞流荘
9 月　４日　紀和町　湯の口温泉　**1**
9 月　５日　紀和町　湯の口温泉　２
9 月　６日　紀和町　入鹿鉱山跡
9 月　７日　紀和町　北山川・瀞八丁
9 月　８日　国道３１１号線　無人市場
9 月　９日　御浜町神木　無人市場
9 月１０日　炎天
9 月１１日　瓦
9 月１２日　冬支度

2006 年　09 月　01 日

熊野の旅　戦争の爪あと　**Little**　Britain

現･熊野市紀和町、旧南牟婁郡紀和町、旧旧南牟婁郡入鹿村には鉱山がありました。銅を産出する鉱山で鉱脈は大昔に発見されたようです。他の鉱山同様戦時体制に入った頃に産出のピークを迎えました。迎えたのではなく無理やり人海戦術で増産したのです。

江戸時代なら無宿者整理や罪人の島流し代わりに鉱山を使ったようですが、昭和の時代には流れ者は当然のこととして朝鮮半島から動員された人も投入されました。更には国際法で強制労働が禁止されている捕虜も送られてきました。

ここ紀和の鉱山にはイギリス軍の兵士が送られてきました。そして鉱夫として働かされました。

食料も乏しい中での坑内労働、言葉も通じない捕虜の身ですから犠牲者も出しました。

終戦まで無事に生き延びることが出来て本国に帰る事の出来た兵士達は戦友会を作ったそうです。その名も『イルカ・ボーイズ』だそうです。

かなり前になりますが、この『イルカ・ボーイズ』のかたがたが戦友の眠る入鹿の地を訪れていました。もうすっかりお年寄りになられたボーイズの方々が訪れた時にはもう鉱山は閉鎖されていました。

元々建立されていた英兵の慰霊碑もきちんと整備されその一角を『リトル・ブリテイン』と名づけました。

小さな慰霊碑ですが、いつもきれいに管理されています。

厳しい労働の中でも、地元の人などの心遣いが心に残っていたボーイズの人も居たようです。

こんな片田舎の山奥にも日本人の戦死者だけではなく、こうした外国人の人の戦死者までもが祭られるような戦争の傷跡が残されているのです。

場所は国道 311 号線・熊野市紀和町板屋地内で国道からほんの少し入ったところです。

道路わきに『Little Britain』の小さな立て札が立っています。

Tags:熊野市

by **je2luz** | 2006-09-01 12:41

2006 年 09 月 02 日

熊野の旅　紀和町入鹿鉱山　石原産業

以前にも触れましたが、ここ紀和町はかつて鉱山の町として栄えました。人口も 20000 人と言われたこともあったようです。勿論、捕虜の人や強制連行など戸籍など関係なく役所でも分からない人も含めてのようですが…

この鉱山は銅を産出する銅山でした。

銅山と言えば『足尾』『神岡』など公害の元凶として名をはせたところが多いのですが、ここ『入鹿鉱山』はさほどの公害騒ぎはありませんでした。

ここの鉱山は精錬所を伴わないものでしたから、精錬所から出るガスや廃液に犯されることが無かったからです。

ここの鉱山を動かしたのは、最近有名になった『石原産業』です。以前、四日市港の汚染が問題になったときも廃液の垂れ流しで有名になった会社で、今回は産業廃棄物を埋め立て用材料として使おうとして問題になっています。

公害が当たり前の、いや、公害なんて関係なく操業する銅山をやっていた会社ですから、廃液やフェロシルトなんてものは気にもならないでしょうね。

入鹿鉱山でも採掘で出た『ズリ』は北山川沿いや谷川沿いに積み上げられていますから、測定すれば重金属などの流出はあったでしょうが、精錬所のように凝縮したものを放出するわけではないので、下流でこの水を飲んでいる新宮市や鵜殿村などでも「イタイイタイ病」などの発生は無かったようです。

今でこそダムが一杯あって電気も豊富ですが、昔は電気も石炭も無い僻地だったので鉱石のままで搬出されたようです。
精錬所が無いので地元に落ちる金は少なかったでしょうが、おかげさまで公害病の大量発生などに見舞われなくて済んでいます。
今でも坑口に続く地所などには石原産業の所有地であることを示す看板が立っています。

ちなみに石原産業もここらへんでは悪い印象はもたれていません。
Tags:熊野市 by **je2luz** | 2006-09-02 11:46

2006 年 09 月 03 日

熊野の旅　紀和町　入鹿温泉ホテル　瀞流荘

かつての鉱山の町紀和町には二つの温泉施設があります。
紀和町の中心の板屋（いたや）から少し離れた北山川沿いに『瀞流荘』と言う施設があります。これは『せいりゅうそう』と読みます。このせい…瀞の字はこのすぐそばの瀞八丁（どろはっちょう）から取られています。
合併後、ここの運営は『財団法人・紀和町観光開発公社』なるものが行っています。
合併前の南牟婁郡紀和町が主体になって作ったものです。
見てすぐに分かるように『お役所仕事』です。採算など合う道理も無し…
全国の田舎に一杯ある施設の一つです。
日帰りの入浴施設もあり、売店も完備しています。二回ほどいったことがありますが、湯は別にしてくつろぐような施設ではなかったように思います。近郷のお年寄りの方が来て遊んでいます。

ここは次に取り上げる『湯の口温泉』と同じ温泉です。なぜ温泉が出たかも次回あたりに書きます。

お役所が企画しお役所が作った『観光施設』ですから黒字になるわけも無し、ものすごく不便なところですから、端から客に来いと言うのが無理なのです。

この赤字を少しでも何とかしようと言うので熊野市にある県事務所では出張できたお客をここに送り込みました。公共交通機関が事実上無いので公用車での送り迎えでした。国道が良くなるまでは 20Km ほど今でも 15Km ほどあるかと思われる山の中に泊まって貰うのですから…勿論、

公用車ですから送迎は無料です。おそらく泊まる費用も公金でしょうね。

まあ、こんな施設は全国に五万までは行かなくてもものすごく沢山ありますから、目くじらを立てる方がおかしいのでしょうね。

地元の税金などまるで足りなくて全国の皆さんの税金で成り立つ過疎の町ですから、税金と言えども全国の皆さんのものです。

赤字を少しでも減らして、税金が消えないように、ぜひ皆さんもここ『瀞流荘』まで入って行って泊まって下さい。旨いものも無いでしょうが、山の中ですから悪い誘惑などありません。

Tags:熊野市

by **je2luz** | 2006-09-03 11:20

2006 年 09 月 04 日

熊野の旅　紀和町　湯の口温泉　1

紀和町の二つ目の温泉は『湯の口温泉』です。

本当はこちらが最初の温泉です。ここに温泉が出たのですが、あまりにも山奥と言う感じなので少し外の出せば観光地になるのではないだろうか…などと言う考えで作ったのが一つ前の『瀞流荘』（せいりゅうそう）だったのです。

ここに温泉が出た理由なども大きな案内地図などと共に掲げられています。国を騙したとか、グルだったとか書くわけには行かないので、計画書に記載された建前が書かれています。見る人のほとんど全員がそれを深く考えないで信じるでしょうね。

看板に書かれているのは

『通産省による資源探査中に偶然温泉が湧き出し…』だそうです。

時効だし、当時は熊野市ではなかったから言えますが、穴だらけにして閉山された入鹿鉱山の残存資源探査のために莫大な金をかけてボーリングなどする訳はありません。いくら無駄遣いの平気な国のお役人でも田舎町の温泉掘削のために事業をするわけには行きませんから、理由が必要だったのです。

お湯が出たのでボーリングは終了し、『本来は埋め戻さなければならない…』このお湯を特例として噴出したままで残しておいたのです。

すごく頭の良い町役場と物分りの良い通産省のお役人の産物です。落語に出てくる鯛のお替りを所望するお殿様並に物分りが良かったのです。

竹下さんが一億円を配った後ではこんな手を使わないで、自前でボーリングする市町村が増え、日本中が温泉だらけになっちゃいましたがね。

まあ、山の中に出現した公的な温泉ですからいまだに入浴料は安いです。

大人３００円とか…この金額は銭湯より安いのでは？？温泉利用者にかかる入湯税と同額程度だと思います。

５００円にしてもどうせ赤字ですから、サービスしても同じですね。

鄙びた木造の小さな浴場でなにもなく、結構いい感じです。リハビリ用の浴槽までそろえた『瀞流荘』とは全然違い安く温泉に浸かれます。それなのに、田舎の人は立派に見える『瀞流荘』の方が好きなようです。確かに、ロビーらしきものも売店も食堂もあるにはあるのですが、味気無いコンクリートの建物なのですがね…

この傾向はここだけではなく日本中の田舎に見られる傾向ですね。

ド田舎に白亜の学び舎とか・・・

風伝峠、丸山千枚田などの散策で疲れたときは、『瀞流荘』からほんの少し１．５Ｋｍほど足をも場してこちらの『湯の口温泉』で疲れを癒されることをお勧めします。

泉質は食塩泉系で飲めば少し塩味がします。

Tags:熊野市

by **je2luz** | 2006-09-04 12:03

2006 年　09 月　05 日

熊野の旅　紀和町　湯の口温泉　２

湯の口温泉は小さな入浴上からスタートしたのですが、少しずつ整備され宿舎？バンガロー？も建てられています。山間で全く敷地の取りようがなかったからとは言え、かつてこの入鹿に点在した鉱夫の飯場みたいな感じです。湯治場の宿舎と言う性格なのでしょうかね。

湯の口があまりにも狭いところであるから発展性がない、とばかりに広い場所を求めて外に出たのが『入鹿温泉・瀞流荘』なのです。余計も来ない入湯客が分散され…

まあ、気の毒なのは前にも書いたように竹下さんがばら撒いた『ふるさと創生基金』なる金かもしれません。

この金は自由であって自由でない性格だったこともあり、金の塊を買った自治体もありましたし、基金にして利息でソフト事業をやろうとした熊野市のような自治体もありました。金利を当てにした計画は金利ゼロ時代になり事業続行が不可能に追い込まれました。当初から金をつぎ込んだ事業の中で多かったのが『温泉掘削事業』です。日本列島どこでも 1000m とか 1500ｍとか掘れば温泉が出てくると言われています。

昔は地表に噴出したものを発見して使ったものです。ボーリングと言う技術が発明されてからも数十メートルとから始まり数百メートルとかの話でした。それでも、温泉探しはまさにばくちで温泉開発の夢を追ってどれだけの人が財産を捨ててきたことでしょう。

ボーリング技術が進歩して 1000ｍを越すようになり、掘れば出るだろうと言われても、水脈に当たらなければやはり出ません。地質探査が進んで確率も格段に向上していますが 800ｍで出るものやら 1200 ででるのやら掘ってみないと分からないのがこの事業です。

おまけに出るお湯が８０℃もあるものから冷泉と言われる冷たいものまでありま

す。それでも、掘れば出ることが多いです。その大金をどうするか…地元の有志に募ったところで集まるところはほとんどありません。そこに降ってきたのが竹下さんの『ふるさと創生基金』です。

旧来の温泉が３００足らずとか言われていたのに、『列島改造論』、そしてこの『ふるさと創生』と、『温泉を掘って観光地に…』と言う発想で温泉探しが行われました。気が付いてみれば温泉の数が 2000 を越えるとまで言われるようになっています。３３００あった自治体も平成の合併で 2000 ほどに減っています。つまり、平均して各自治体に一つずつ温泉がある勘定です。

『温泉があるから観光地』ではなく『温泉の無い所ってあるの？』の時代なのです。

こんな状態ですから、鳥も通わぬ…ではないですが、公共交通機関もまともにない、時間的にはバリ島より遠いところにはお客さんは来てくれにくいです。温泉好きの人でも一生かかっても回りきれない数が出来ちゃったのですからね。

ここ温泉の呼び物の一つに、かつての入鹿鉱山時代のトロッコの線路を利用したトロッコ列車があります。『入鹿温泉・瀞流荘』から『湯の口温泉』までのほんの少しですが、おもちゃのような『バッテリーカー』が走っています。乗ってみる価値はあるかと思います。

しかし、今年のシーズンは運休していました。『平成１８年１２月３１日まで、工事のため運休』の張り紙があります。期間が終わって運転されるのかどうか保証の限りではありませんが、ここに来れれたら乗り場に行ってみてください。

前の写真の写真の一番奥に見えるのが『湯の口温泉駅』です。

Tags:熊野市

by **je2luz** | 2006-09-05 12:04

2006 年　09 月　06 日

熊野の旅　紀和町　入鹿鉱山跡

入鹿温泉瀞流荘と湯の口温泉の間にはトロッコ列車が走っています。トロッコ電車は昔この鉱山が営業中であった頃、幹線として使われたほんの一部を復旧し運行しているものです。

小さな箱をバッテリー駆動の機関車が引っ張るもので今の遊園地のおもちゃの汽車より小さいものです。

昨日の写真にあるように本数はわずかですが、動いていれば乗る価値はあると思います。

もっとも、乗っても何も見えません。まさに鉱山のトロッコ列車ですから、トンネルばかりです。途中でほんの少し顔を出しますが道路からなら良く見える北山川もほとんど見えません。観光用に作ったものではありませんからね。

ここは瀞流荘側の駅で、昔も車両基地などのあった場所なので線路の数も多く、手動の転轍機が一杯あります。

本来の終点はもう少しトンネルを抜けて今の町の中心部に近いところでした。そこから先は鉄路ではなく索道と言われる空中ケーブルで紀勢西線阿田和駅まで運ばれました。およそ 10ｋｍはあるでしょう。スキー場のリフトのように沢山のバケットを数珠繋ぎにしたものでした。昭和３０年代前八までは忙しく動いていたものです。

観光用に枕木も入れ替えて復旧したのですが。トンネルは奥に入ると当然昔のままの素掘りの物です。明るく照明をかければ迫力満点代わり、恐ろしくて乗ってられな

いかもしれません。遊園地の作り物ではなく本物の岩石です。先ごろの木津川下りの事故のようにほんの小さな岩でも落ちてくれば大変ですからね。かといって、落石防止の巻きたてをしたらムードもないし、第一そんなお金があるわけもありませんね。

　このトンネルは特に地下に降りてゆくわけではありませんが、長い素掘りのトンネルに地下水がにじみ出て空気を冷やすので流れ出てくる空気は恐ろしく冷たいものです。

　炎天下歩いて焼け付いた体もこのトンネルの入り口に座るとすぐに冷まされます。そして、１０分も経たないうちに寒くなってきます。冬になると生暖かい風に感じるように年中気温があまり変化しないものです。

　この瀞流荘駅の周辺を見るだけでこの『入鹿鉱山』がいかに隆盛を極めたか偲ぶことが出来ると思います。

カメラは**ミノルタ・オートコード・L**

Tags:熊野市 モノクロ クラシックカメラ　　by **je2luz** | 2006-09-06 12:19

2006 年　09 月　07 日

熊野の旅　紀和町　北山川・瀞八丁

紀和町は北山川のほとりにあります。

この北山川は遡ると一方は熊野市と尾鷲市の境矢ノ川峠峠からの水を集める『大又川』と大台ケ原の南斜面、伯母峰峠からの水を集める『北山川』が合流した清流です。

この清流も今では「よどんだ水」が放出されたものでかつての清流ではないのです。

上流には池原ダム・七色ダム他のダムが水をせきとめてから放水しているからです。しかし、それでもこの北山川は透明度の高いきれいな水が流れています。上流に大きな町もなく、紀伊山地の豊かな緑があるからです。

この大橋を渡ると向かいは奈良県、このあたりは結構ややこしくこの下流と上流には和歌山県の飛び地があり、やたらと県境があります。

熊野川・北山川は急流で人里もほとんどない山間部を流れる川です。昔はこの流域の材木を新宮に運ぶ『筏流し』の川であり、重要な動脈でした。しかし、戦後になり道路が整備されると筏流しもなくなり川は山間で眠り続けています。

この川を有名にしたものに『瀞八丁』があります。ここは『とろ』ではなく濁って『ドロ』と読みます。関東の人は秩父の長瀞（ながとろ）の関係か濁らずに読むようですね。

『瀞八丁』は向こうに見えるような山並みに行き場を失った川がわずかな山の裂け目を探し出して流れている渓谷です。

観光スポットの少なかった頃はこの瀞八丁は関西の大きな観光ポイントでした。

河口の新宮から、テレビに出てくるマイアミあたりの湿地帯で活躍する、後に大きなプロペラを付けた『プロペラ船』で爆音と共に熊野川を遡ったものです。

今は、ずっと上流のから乗船し、船も爆音公害の出ないウォータージェットと言うイカのような原理の船になっています。速度も速く短時間で瀞八丁を見物できます。

この瀞八丁より更に上流では和歌山県北山村による『観光筏下り』が夏のシーズン

だけ行われています。
　このように観光資源として川は使われていますが、両方共に採算の方は？？のようです。
Tags:熊野市

by **je2luz** | 2006-09-07 11:40

2006 年　09 月　08 日

熊野の旅　国道３１１号線　無人市場

　日本中何処の田舎でも見られる無人市場の光景です。
　尾鷲市から海岸線を走り、熊野市内で国道４２号線に合流、約 3Km ほど併用し、今度は山を貫き紀伊半島を横断する３１１号線は通行料の少ない道路です。
　この道は尾鷲・熊野を結ぶには４２号線に比べはるかに遠回りで、まだ、未改修区間も残っています。熊野市・田辺間は直行するのであれば最短なのですが直行する必要のある車はほとんどありません。新宮市を通らないこの道路では地方路線としても通行量が少なくなります。
　しかし、この３１１号線沿いは『無人市場』と言うものが出来始めた頃から道路のそばに屋根付きの箱を並べた店が並びました。
　確かに、回りは畑が多いし農家ばかりですが、一体誰が買うのだろうと言うほど並んでいます。熊野市からわざわざ買いに来る人も結構居るようですから、売れるので

しょうね。
本当の出荷農家などほとんどないので、いかにも自家栽培と言った感じの野菜が出てきます。そして、ミカンのシーズンに入るとほとんどの箱はミカンで埋まります。それでも売れてゆくのでしょうね。

夏の終わりのこの時期は夏野菜も終わり、出すものが少ないのか、どの箱も空っぽです。そのためかひっくり返りそうになった箱もそのままです。ミカンが出るようになればきちんと起こすのか、それともこのお店群も老齢化と過疎化で店主がいなくなったのか・・・
少しわびしい光景です。
カメラは**ミノルタ・オートコード・L**
Tags:熊野市 クラシックカメラ モノクロ

by **je2luz** | 2006-09-08 10:38

2006 年　09 月　09 日

熊野の旅　御浜町神木　無人市場

昨日に引き続き写真は無人市です。

昨日の写真に比べると全体をひいて写したのでお店は沢山並んでいます。それでも、写真の雰囲気はもっと寂しくなったような気がします。

このあたりは『神木』（こうのぎ）と呼ばれます。「神」と言う字が付く地名の一つです。

熊野周辺の山は険しいと言っても岩山は少なくなだらかな稜線を持った山が多いのです。だからこそ林業が盛んなのです。

しかし、この神木の裏山から紀和の境方面にかけては奇岩が露出したところがあちこちにあります。

大きな岩などのある場所は神聖な場所として色んなものが祀られてきています。だから、こうした岩を背後にしょっているところが「神」の字を付けられたのかと思います。

ここは国道 42 号線から 2Km 余り山に入った国道 311 号線沿いです。海岸との間には低いですが山があり海側に比べ寒くなっています。そのためか、ここのミカンはすぐ海側にある「市木」のミカンより酸っぱいといわれています。しかし、熱心なミカン農家も多い土地です。当然、この市場の箱はもうすぐまっ黄色になります。

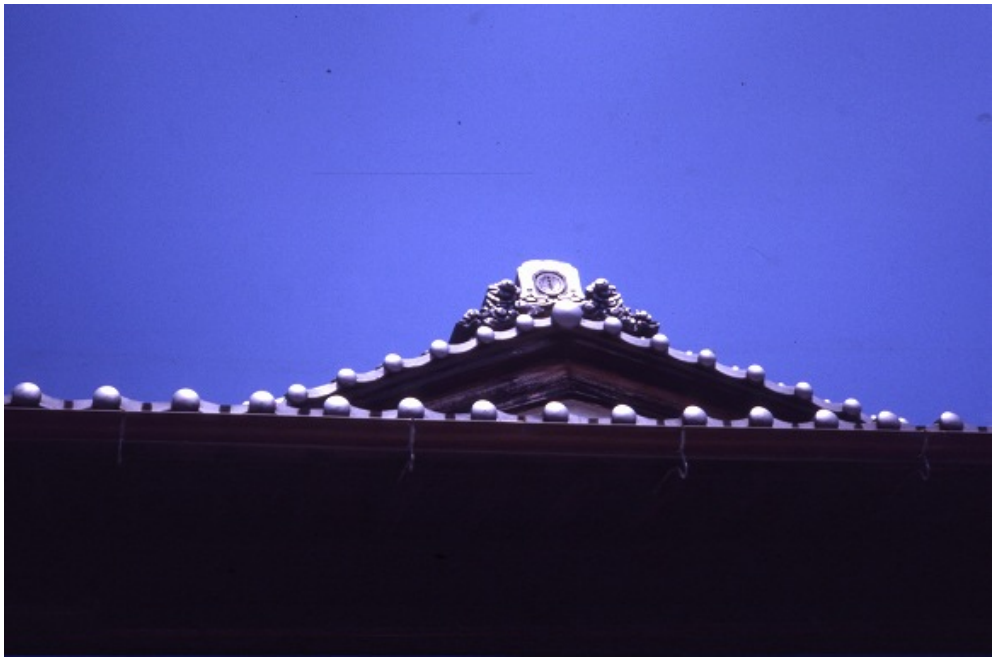
国道 42 号線の方がはるかに通行量が多いのですが、無人市場はこちらの 311 号線の方がはるかに多いですね。こちらの道路は農地、農家の目の前を走り、車も安心し

て減速、停車できる環境にありますね。
　ここは最大の無人市場ですが、道路が少し広くなったところ毎に数個ずつの店が置かれています。そして、この沿線では紀和町との境の風伝トンネルのこちら側にある無人市場は『元祖・無人市場』として、国道改修で場所が悪くなったのに人気があります。
　きちんとした建物で郷土物産を売るところも出来ていますが、野菜やミカンはこうした無人市場のほうが人気があるようです。
　しかし、困ったことに、『お金を入れない人』が居ます。もっとひどいのは商品も売上金も持っていってしまう人が居ます。それがいやで店をやめた人もいるくらいです。売り上げがないのがいやなのではなく、そうした人間の所業を見るのがいやなのです。
カメラは　**ミノルタ・オートコード・L**
Tags:熊野市 国道４２号線 モノクロ　　by **je2luz** | 2006-09-09 12:37 |

2006 年　09 月　10 日

熊野の旅　炎天

　今年も夏は暑かった・・・
　毎年、毎年、その年の夏が一番暑いように言うのが人の常です。しかし、今の流れなら大きく見てそのとおりなのかもしれませんね。
　熊野路は今年、梅雨時の雨は少なかったのです。それなのに、各地で水害が出て連日報じられたのでこの辺も一杯降ったと錯覚している人も多いですね。人間なんてそんなもののようです。



『年のうちに丁度良いのは三日しかない』とか言いますが、９月も 1/3 過ぎてきて

いるのに結構暑い日が続いています。
　熊野熊野古道は杉並木の中…なんて言っても、歩く行程のほとんどは炎天下になります。クライマックスだけが木立の中…ってことです。東海道と違い平地なんてほとんど無く、おまけに残っているのは峠道だけです。真夏に歩くのはやはり難業です。そのため。観光客の数もまばらです。
　シーズン中でもポツポツとしか見かけないお客さんですから真夏にはいなくて当然でしょうね。

　澄み切った青い空に焼け付いた瓦…セミの声…夏らしくて良い光景ですが、とても何キロも歩きたくはないですね。
　ここは木本町にある南紀ツアーデザインセンター・・・熊野古道歩きの休憩所です。古民家も見学できる所で、熊野市では熊野古道の中心になるところです。これがもう少し涼しいイメージの木曽路なんかだと夏休みには親子連れがやってくるのでしょうが、熊野路は暑いイメージですから来る気にもならないようです。
　そもそも、熊野古道に来る人を見ていると、全国を見て歩いてもう行くところもあまり無い様な感じの人が多いですね。年齢も結構高いようで…
　大昔、熊野詣が盛んな頃でもこの辺を歩くのは物見遊山ではなく、極楽往生を望みだす年齢の人だったのでしょうから…
　あえて灼熱地獄を覗くことも無いでしょう。
　年に三日しかない丁度良い日に訪れてください。
カメラは**ツァイス・ウェラ３・テッサー50ｍｍ**
Tags:熊野市 クラシックカメラ　　by **je2luz** | 2006-09-10 11:37

2006 年　09 月　11 日
熊野の旅　瓦

きれいに葺かれた瓦屋根は良い家の証です。
瓦というものは全国各地で焼かれていたものです。
目茶目茶重くてその割りに安く、大量に必要なものですから遠くから運ぶのは不経済だったのです。だから、このあたりにも瓦を焼く業者があったのですが、今ではこうした地場の瓦製造業者というものは全国的に消えてしまいました。
昔でもお金持ちの家は三州（三河）や淡路の瓦を船で取り寄せて葺いていたものです。
古い家を取り壊す時に剥ぎ取られる瓦には様々なものがあります。
大きくてしっかりしたものから異様に小さくて歪だらけのものまであります。そのまま家の作りにも比例しています。
古くはここ熊野地方は『杉皮葺き』が庶民の家の屋根でした。
寒い地方の『茅葺』や『藁葺』の家同様、戦後の頃からトタン屋根に変えられてしまい残念ながら今では見ることが出来ません。
杉皮をはぐこともなくなったので、もし今杉皮葺きを再現するとしたら瓦なんかよりはるかに高くつくと思います。
瓦葺の屋根でも下地の防水には杉皮を敷いたものです。昭和 40 年代には太い杉の木を切ったときには杉皮を剥いで出荷したものですが、人件費の高騰で出来なくなってしまいました。
杉皮の上に練り土を載せ瓦を葺くのが立派な家の常識でした。
今式に考えると地震対策には逆行する構造ですが、太い柱と釘を使わない柔軟な構造で、立派な家は倒れなかったようです。
この家も南海・東南海地震を越えてきたものです。

カメラは**ツァイス・ウェラ３・テッサー50ｍｍ**
Tags:熊野市 クラシックカメラ

by **je2luz** | 2006-09-11 13:41

2006 年　09 月　12 日

熊野の旅　冬支度

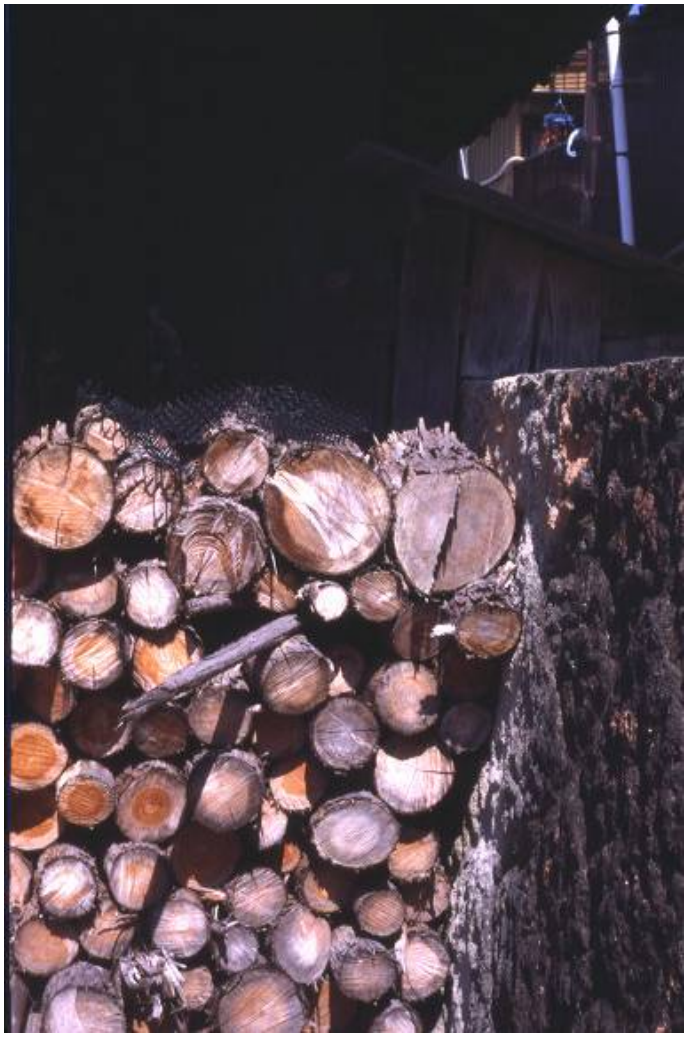
熊野は南国…とは言っても所詮は本州、冬はやはり寒いです。ほとんど霜などというものを見ない海岸線でも、そこにずっと暮らしていれば、暖かい冬が寒く感じるものです。

山間部に入ればそこは北国並みの冬があります。日本海からの雪雲は鳥取、福井の山に雪を降らせ、残りの雪を大台山系に降らせてしまうので雪はあまり降らないのですが、気温は下がります。

昔は『ガス』などと言うひねればすぐに火がつき、見ている間にお湯がわくというような便利なものが無かったので、火鉢に火を入れ暖を取ると共にお湯を沸かしていたものです。少し大きな家では客の出入りの備えてかまどで一日中火をたきお湯を沸かし続けていたものです。

一日中かまどに火を入れておこうとすると、火の番もいるし、膨大な量の薪が要りました。そして、その薪は秋の材木伐採のシーズンに運び込まれて山積みされたものです。この光景は日本中の田舎に見られたものですが、今ではあまり見かけなくなりましたね。

寒い地方では薪用に雑木山が用意され、薪は雑木を割ったものは主です。しかし、この辺は古くから薪炭用の細い雑木山以外はほとんど杉桧が植林されていたので、薪も杉桧がほとんどでした。火力は雑木の方がはるかに強いので、雑木の薪は特別扱いして高級品でした。



この薪は杉桧の枝を切ったもので、一番普及品のものです。ぼろぼろ皮が落ちるし火の付は悪いし…ということで、もう少し太い部分を割った『割り木』のものが高級です。

近代に入ってからは製材所から出る廃材、背板が薪として販売されていましたが、良く燃えるのですが火持ちが悪く、それこそ付きっ切りでくべ続け無くてはならない代物です。この辺では『バタ』と呼んでいました。今でも、地元の需要の分は製材所で約４０cm に切って作っているようです。

木本のような町場では丸木や割り木のような山から来るものは高くて入手しにくいので『バタ』が主力でした。

写真にある薪は今年の冬に備えて用意されたものです。いまどき、こんな立派な割り木や丸木を用意して接待用のお湯を沸かすことが出来るご大人は…そう、民間人ではありません。皆さんをお待ちしている『紀南ツアーデザインセンター』というところです。

ここは木本きっての旧家の『奥川邸』です。地元を離れた持ち主からの寄付で今は熊野市がこうしたハイカラな名前の団体に委託して、熊野古道歩きの休憩所を兼ねて公開しているものです。来場される方には熊野の番茶の接待があります。冬場は『おくどさん』で火が燃えています。ぜひお立ち寄りください。

カメラは**ツァイス・ウェラ３・テッサー50ｍｍ**

Tags:熊野市 クラシックカメラ 熊野古道 y **je2luz** | 2006-09-12 12:33